

Sport Academy

—— スポーツアカデミー2014 ——

1964から2020へ = 歴史を伝える意義

産経新聞社 特別記者 兼 論説委員
佐野慎輔

2014年11月26日(水) 19:00~



1964の意義を振り返る

1964の意義

1. 日本にもたらしたものの

- ①ハード面でのレガシー
- ②ソフト面でのレガシー
- ③両面のレガシー

2. 日本発→世界にもたらしたものの

1964の意義

1. 日本にもたらしたものの

①ハード面でのレガシー

【社会インフラ】

— 交通網

— 施設

— 上下水道の発達

— 海外渡航の自由化

<Episode> 高見山の入門

1964の意義

1. 日本にもたらしたものの

②ソフト面でのレガシー

- 日本スポーツ少年団
- 民間のスポーツクラブ

(池上スポーツクラブ、山田スイミングクラブ)

日本スポーツ少年団
について

1964の意義 (1. 日本にもたらしたもの)

日本スポーツ少年団の創設と発展

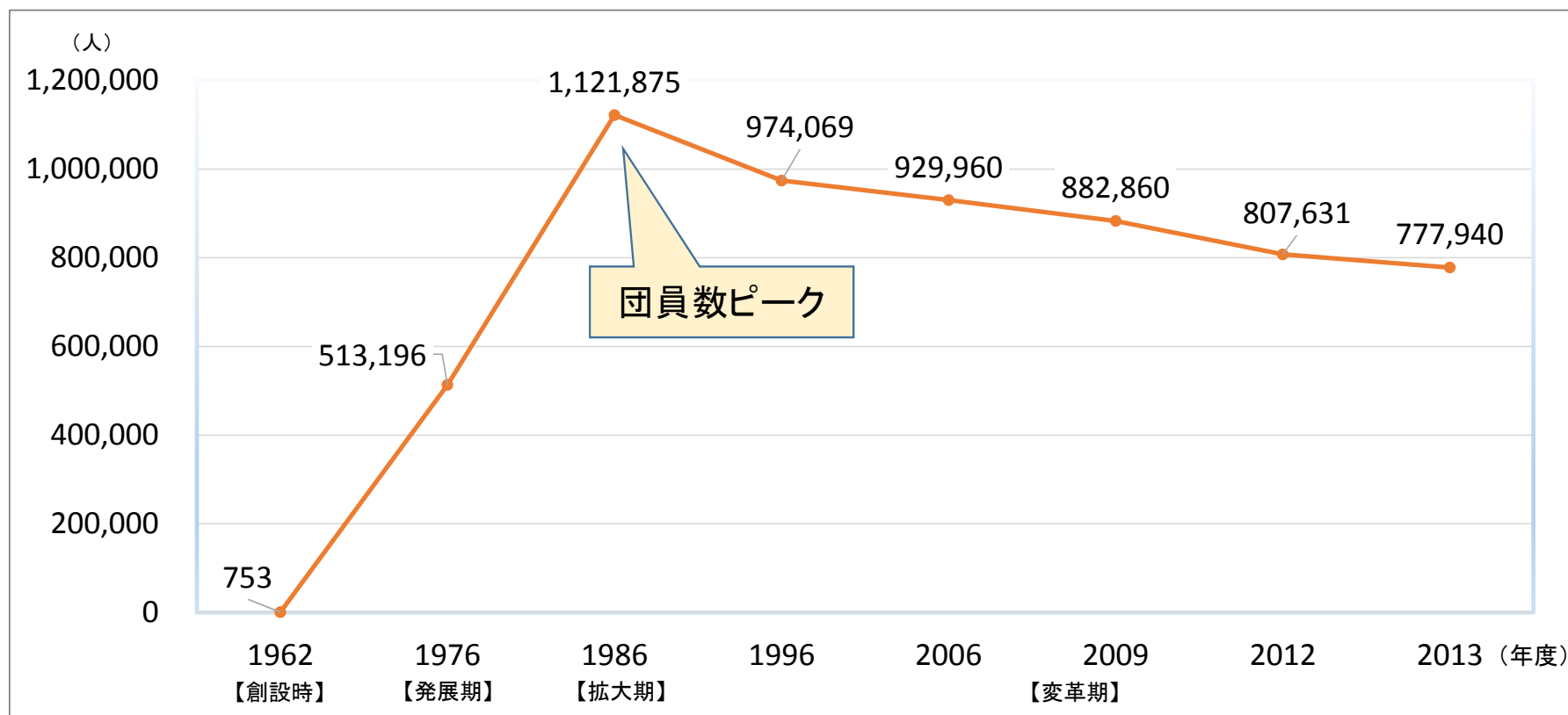
■ 1962年創設

- ・東京オリンピック大会開催を契機とした「オリンピック青少年運動」が母体
- ・創設当時の団数 22 団、団員数 753 人

■ 設立の背景

- ・オリンピック・ムーブメントとしての青少年の健全育成
- ・当時の社会における青少年問題への対策

スポーツ少年団の登録状況の推移(団員数)



日本体育協会「日本スポーツ少年団50年史」(2013)より作成

1964の意義 (1. 日本にもたらしたもの)

民間スポーツクラブの創設・普及

池上スポーツ普及クラブ(現・池上スポーツクラブ)(1965年)

小野 喬(1964五輪・体操男子団体金メダルほか)、小野 清子(1964五輪・体操女子団体銅メダル)夫妻が設立。

後にモスクワ五輪代表(不参加)の北川淳一、ソウル五輪代表の小西裕之を輩出。

⇒スイミングクラブを中心に全国に普及

- ・山田スイミングクラブ(1965年)
- ・セントラルスポーツクラブ(1969年)

1964の意義

1. 日本にもたらしたものの
③両面でのレガシー
—マナーの向上

—パラリンピック: 国内の障害者スポーツの覚醒

障害者スポーツ
について

1964東京パラリンピックのレガシー

1. 障害者スポーツ組織の設立

I. 障がい者スポーツ競技団体(1963年～)

- 日本ろうあ体育協会(現、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会)(1963年～)
- 1970年代:スキーなど3団体、1980年代:卓球など7団体、現在:59団体

II. 日本障がい者スポーツ協会

- 1964年東京 ⇒財団法人日本身体障害者スポーツ協会を設立(1965年)
- 1998年長野 ⇒日本障がい者スポーツ協会・パラリンピック委員会へ改称(3障害統合)

II. 都道府県・指定都市障がい者スポーツ協会(1973年～)

- 厚生省社会局厚生課長通知、協会設立を促進

2. 障害者スポーツ大会の開催

- I. 都道府県・指定都市身体障がい者スポーツ大会(1963年)
 - 厚生省社会局長通知 ⇒ 予算補助
 - 山口大会(1963年): 1都8県から468名(肢体・視覚・聴覚障害)の参加
- II. 全国身体障害者スポーツ大会(1965年～)
 - 全国知的障害者スポーツ大会(1992～)と統合 ⇒ 全国障害者スポーツ大会(2001年～)の開催
 - 参加者数: 第1回大会(1965年): 523名 ⇒ 第36回大会(2000年): 1,259名

3. 障害者スポーツ施設の開設

- I. 障害者スポーツセンターの開設
 - 大阪市長居障がい者スポーツセンター(1974年～)
⇒ 生涯スポーツの発展、全国的に同様の施設が開設(22施設)

1964の意義

2. 日本発→世界にもたらしたものの①

—「スポーツ中継」というTVコンテンツの確立
五輪でのマラソン全中継

<Episode> はだしのアベベ

—放映権料
—衛星中継

1964の意義

2. 日本発→世界にもたらしたものの②

ー日本の高い技術力＝国産技術による「科学の五輪」

- ・計時のセイコー（高精度ストップウォッチ等）
- ・テレビの技術革新（国内メーカーによる競争）
- ・印刷技術の向上（ポスター印刷など）

ー「ピクトグラム」



1964の意義

- 2. 日本発→世界にもたらしたものの③
—「アジア初」という意義
(1988年ソウル、2008年北京)

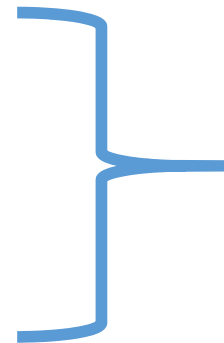


2020＝“成熟”への挑戦

2020への挑戦

- 残すべきレガシーとは？
国威発揚からの脱皮
成熟都市におけるオリ・パラ

- ①ハード面でのレガシー
- ②ソフト面でのレガシー
- ③両面のレガシー



2020への挑戦

■遺すべきレガシーとは？

ハード&ソフト

①2020年東京パラリンピックが目指すバリアフリー
～インフラ&こころ～

ソフト

②子どもたちに何を遺すのか？
－“世界”に触れる貴重な機会
－世界の一流アスリートへの憧憬を普及につなぐ

2020への挑戦

■遺すべきレガシーとは？

ソフト

- ③スポーツの文化としての定着
＝スポーツが日常生活の中に溶け込む
(する・みる・ささえる・まなぶ・ふれる等々)
例・・・自転車専用道路

ハード&ソフト

- ④多様性 (Diversity) / 共生社会
－高齢者と子ども
－障害者と健常者

心と環境のバリアフリー社会
の実現

最後に ～2020に向けた課題～

キーワード:「集中」と「分散」

集中

- コンパクト開催＝アスリート・ファースト
- デメリットをメリットに変える発想

分散

- 地方創生 ～ 1校1国から1県1国へ
- 被災地からの発信